

柴田光蔵教授追悼の辞

柴田先生が逝去された。ここに、生前ご指導を受けた弟子が集まり、思い出、追悼の気持ちなど、短く寄せ書きを掲載する。

柴田光蔵先生の思い出

西村重雄

京都大学法学部ローマ法講座の二人目の担当者(初代春木一郎教授は明治45年6月東京大学転出)である田中周友教授は、京都下鴨神社の格式ある社家出身で糺の森の中のおすまいで(小生も縁があって時々お話を伺いに上がった)、旧制帝国大学の最後の卒業生であり、書を嗜まれるなど、いわば京都文化を体現されたような方であった。明治33年(1900年)のお生まれで、小柄な方であったが、昭和38年9月退官後も「三世紀を生きる」と公言され、良く散歩をされ、実際96歳までお元気であった。柴田光蔵先生は教授のローマ法の最後のお弟子として、その講座を引き継がれ、共通のこともあったが、また対照的でもあった。京都府乙訓郡大山崎町の旧家のご長男としてお生まれになり、京都府立新制朱雀高校を経て、昭和30年京都大学法学部に入学された。ご自身でしばしば「私は高校時代から大山崎の猿でゲリラ戦が得意」とおっしゃっていた。たしかに、持ち前の行動力で人の意表を突く行動で周囲を驚かされることがあった。授業担当が決まるや、「ローマ法」の配当学年をそれまでの3,4回生配当から2回生配当科目に変更を希望され(このため昭和37年入学生は私も含めほとんど「ローマ法」を履修しなかった)、研究室での昼食時間を利用しての学生院生のためのフランス語入門、ラテン語入門講座の開設、更に、以前には全く考えられなかった、国内ローマ法の若手勉強会(自ら宿舎を手配し、旅費を工面して)実現された(今日のローマ法関係者の協力がスムー

ズなのはいわばその賜物)。また、共働きの研究者の第一世代として、奥様と家事、育児をよく分担されて、3人のお子様を立派に育てられたのは、見事である。ただ、数年前に奥様に先立たれ、気弱になられたようで、元来壮健であられたのに恩師の歳を超えられることがなかったのは惜しまれる。

お住まいを度々変更されたが、電話番号は最後までずっと同じで、いずれも府立植物園南の賀茂川東岸北大路付近であった。この地域は、昔からの街並みのある今出川以南とは全く寒さが違い、冬になると時々雪が降り積ることがある（せいぜい5センチ程度であり、多くは午前中には消えてしまう程度）。雪が積もれば、家の前の雪を除くのが、町の習わしである。そして、自分の家の前だけでなく、お隣の雪も同時にそっと適当な分を掃いておくということになっている。次に雪が積もった朝は、必ず早めに起きて、お返しにちょっと多めにお隣の分を除くのがエチケットなのだそうである。ところが、北大路付近は時折（普通は2-3週間に一度位）しか雪が積もらない（北に約二キロ御土居の外側のだよかな田畑が広がる地域に育った私にはよく理解できる）ので、厄介なそうである。この話を私にされたのは、先生にとって悩みの種であったのであろうか。奥様は温暖な岡山のお育ちであり、また、大山崎では、滅多なことがなければ雪は積らない。京都観光に訪れる方がたにとっては思いも寄らない京の日常の一コマである。野球でもテニスでもいわば、無敵を誇られた先生であったが、時折の北山からの雪は苦手であったようである。

柴田先生は、小生にローマ法研究者への道を開き、校正の仕方を伝授いただき、（法学部の伝統に忠実に）研究には一切口出しせず

見守るといふ有難い指導者であった。私はその最初の弟子に当たるが、必ずしも従順ではなかっただけに、賜った心遣いに対する感謝の念は尽きない。ここでは、多くの方が見過ごされたであろう先生の一側面を記し、先生のご冥福をお祈りする次第である。

恩師弔いのため上洛車中にて、大山崎付近を過ぎし折、浮びし歌一首

時雨ふり 錦なしたる 紅葉葉も うらを見せ おもて見せつつ
散り落つるかも

法光

合掌

(2022. 11. 25 記)

柴田先生を偲んで—学生の頃

吉原達也

柴田光蔵先生にお目にかかったのは2回生のローマ法講義であり、その後3回生のときに外国書講読(仏)を受講した。研究室での少人数の授業で、先生と親しく接するきっかけとなった思い出深い授業である。前半はクセジュのミシェル・ヴィレー『ローマ法』の歴史の部分と後半はジャン・アンベールの『古代法』のローマ私法に関する部分であった。当時先生は、判例タイムズ誌に、「法律ラテン語教室」を連載されておられ、毎月抜刷をいただくのが楽しみでもあった。雑誌連載と併行して、キケロ『トゥッリウス弁護論』『カエキーナ弁護論』など一連の法廷弁論に関する論稿を次々と精力的に発表されておられた。先生が硬式テニスを本格的に始められたのもこの頃である。少しお手合わせさせていただいたこともあったが、先生のパワー・テニスにはまるで歯が立たず、早々に撤退するしかなかった。テニスは先生が終生愛されたスポーツであった。先生は研究室で仕事されるのを日課とされておられた。午前中の仕事を終えると、昼休みはテニスをされ、また午後は夕方まで仕事を

続けられ、つねに何ごともフルパワーで立ち向かっておられた姿は忘れられない。大学院の頃は、ちょうどカーザー『ローマ私法概説』の翻訳の時期と重なっている。最初の翻訳原稿から本になるまでほぼすべての段階を目の当たりにさせていただいたのだが、のちに自分自身が翻訳に携わる機会に大きな糧となったと思っている。その一方で、先生は、『概説』に引用されている法源史料類を中心に、タイプ打ちされた原文と日本語対訳からなる厩大な大版のカードを作成されておられた。このカードは、ローマ法の重要法文を見通すことができる貴重な成果であったはずであるが、その所在が分からなくなっているのが今となっては残念でならない。

大学院に入った頃、先生に誘われて訪れた下鴨の田中周友先生宅(今はその面影もなくなってしまったが)で、田中先生がかつて主宰されていた京都大学西洋法史研究会による学説彙纂翻訳のことなどをお聞きしたが、自前の抜刷製本版は今も手許で参照させていただいている。先生がご家族で軽井沢にしばらく滞在されるというので、勉強合宿と称して数日ご一緒したことがあった。ちょうど東京大学の片岡輝夫先生も旧軽井沢の別荘に滞在されておられ、両先生のローマ法をめぐる話を間近でお聞きしたことも懐かしい思い出である。その一方で当時先生が大学の枠を越えた同世代の交流する機会を設けて下さったこともありがたいことであった。暑い夏の京都に集まって、葛西康德さん、芹澤悟さん、口石久美子さんたちとの研究会のあと、先生に熱いおでんをご馳走になったことは今でも共通の話題となっている。その時以来科研などの共同研究を通じて交流を長く続けてくることができた。また私事ではあるが、家内との結婚にあたっては先生ご夫妻に媒酌の労をとっていただいた。の

ちにイタリア滞在中家族ともどもクリフォ先生のご高配にあずかれたのも、両先生のご親交のおかげに負うところが大きい。19歳の時に初めて先生のご指導を仰いでから今日に至るまで50年を超える。この間に先生からいただいた学恩は計り知れない。ここ数年コロナ禍のこともあり、直接お目にかかって新しい研究プランをお伺いする機会を得られなかったことは残念なことであったが、その間も電話の向こうからつねに励ましの言葉をいただいたことをずっと心にとどめておきたい。長く温かく見守って下さった先生と、2年早く先立たれた奥様に心よりの感謝を申し上げるとともに、お二人のご冥福をお祈り申し上げる次第である。

柴田先生の思い出

林智良

柴田光蔵先生は、1981年の春に開かれた京大法学部新入生歓迎の懇親会にて教官として登壇され、「大学入学は成人をつくる」という法格言を披露され座を沸かせる一幕があった。当時のおおらかな風潮を前提とするお話であるが、新入生であった自分は大変深い印象をいただいた。(関西風の言い方で)2回生になれば、必ず受講致そうと決心して、翌年履修した。

柴田光蔵先生から初めてお言葉を頂戴したのは、1982年、2回生の夏休みに入る直前に当時の第一勧業銀行百万遍支店でのことであった。その場では将来の希望などにつきご下問になり、基礎法学か政治学専攻で大学院進学を考えておりますと申し上げますと、一度研究室に遊びに来なさいとお誘い下さった。そこから、当時も頻繁になさっていた引っ越しのお手伝い等を致すようになった。その頃の自分は相当な肥満体だったためか、テニスのお誘いは頂戴しなかった。学部生時代に「君、研究を進めてゆくには、まず自己管理だ

よ」とご助言をいただき、その後は減量に励むこととなった。

筋骨たくましく大柄なお体で、引っ越しにあたって大きな庭石なども一人でうなりつつ持ち上げられていた。小休止の際に、「自分は絶えず研究と格闘している、その日々では死が安らかに思える」とおっしゃって、大学生の身として返答に詰まったことを覚えている。後日そのエピソードを申し上げると、そんなことを言ったかと大笑いなさっていた。しかしその後も、「もうこの1本で論文を書くのを休む、休みを取る。家内に言われている」と何度もおっしゃりつつ、直ちに次の作品に取りかかれる後ろ姿を永らく見上げてきた。先生の膨大なお仕事をなす一編一編と、当時の庭石がどこか二重映しとなる。

自分は先生のご指導の下で学部演習を受講し、大学院進学をお許しいただき、助手に採用していただいた。ジュリアーノ・クリフォ先生のもとで学ぶ道を付けて下さったのは柴田先生である。さらに博士論文審査にあたっての主査をおつとめいただいた。京大らしい放牧型のご指導で自由な研究をお許し下さり、学恩に申し上げる言葉も見つからない。助手時代に天安門事件が起こり、抗議に参加した自分に「もう少し立場が落ち着いてからにしてはどうか」と心配してお声がけ下さったことを有り難く思い出す。私事ながら、連れ合いとの結婚にあたり媒酌人の労をお引き受けくださった。大山崎のお宅にご挨拶に上がった際に大きな老犬が登場し、二人を値踏みするような観察をうけたことが心に残っている。

自分は、多くの助けで研究者キャリアを続けることができた。奈良産業大学の講師職を始めとして教えるようになってからも、1年に1度程度、新しい論文の抜き刷りとコーヒー豆を携えて北大路の

周辺でご報告とご機嫌伺いに上がった。あのときの緊張感を、今はもう心の中の対話で再現するしかないことが悲しくてならない。いちど自分の個人的不調で、その間隔が2年近くになった折は、「林君はどうしたのかね」というお声を伝えて下さった。報告の場としていつも新しいお店を開拓して指定されていたことも、どこか頻繁な引っ越しと重なる。吉原達也先生の退官記念号寄稿論文にて、難物のアクィーリウスの問答契約という対象を選んで一太刀浴びせてみた。格闘の結果で概念図のようなものを付けたのだが、それをご覧になった際に「こういう図が書ける人は賢いんだよ」とお誉めを下されたことが大変有り難く、強く印象に残っている。

柴田先生、先生の積み上げられた多くの礎石を見上げながら、自分は今後も拙い歩みを続けて参ります。ありがとうございました。どうか安らかにお休み下さり、我々をお見守り下さいませ。

柴田先生のこと

佐々木健



柴田先生が、お隠れになった。イタリア人なら、「scomparsa」と言うかもしれない。見えぬけれども、あるんだよ、と。

先生が留学されたローマ大学には、正門正面に、ミネルヴァの像がある。智慧の女神である。先生は、当方が同じくローマ大学に留

学していた間、奥様とローマに来られた。存命のクリフォ教授と、研究室で思い出話に花を咲かせた後、構内を散策した。擦れ違う学生に、「食堂はどこに？」と訊かれたが、「もうない」とのこと。奥様との苦学も想起され、感傷的に見えた。

奥様と、我が家の妻子と合流し、ボルゲーゼ公園近くのレストランに。先生ご愛用とのことで、店員とも和やかに話された。その後、公園で奥様が撮影された写真は、今も手許にある。先生に買ってもらったアイスクリームを、我が子も先生も一緒に食べる姿で。

先生には、法名が与えられた。当方の息子と共通するのは、「慧」の字である（法名のもう一文字は、お名前から採られた）。留学先のローマ大学には、Sapienzaなる別名がある。智慧の意である。留学先の名を得た先生は、彼岸で、奥様とローマのことなど、語らいの最中であろう。



（ボルゲーゼ公園にて。柴田信子先生撮影のもう一枚。右の鞆はローマ来訪時に持参され、当方に贈与して下さった。以後、日伊間を何度も往復するなど、活躍している。）